

強者となる道(3)

真の強者、真の強者になりたい。

威風堂々、数万の軍隊を率いて敵軍の唯中に連戦連勝する將軍の姿が幾つとなく眼に浮ぶ。我らはかゝる強者にも心がひかれる。

一世の大宰相となつて、反対党の猛撃をひしいで、おのが手腕を天下に布く大政治家の伝記にも心がひかれる。彼もまた強者たるを失わない。機略縦横、全身これ智、一代に巨万の富をたくわえて、豪華をつくし、高位高官をもその前に拝跪せしめる富の人、腕の人、大実業家にも心をひかれる。

三寸不爛の吉相をふるつて、天下の人心を左右する大雄弁家にも心ひかれる。彼らは強者の如く見えるからである。

しかし我が衷心のささやきは、果して彼らに真に感心するだろうか。そうだ、たしかに感心する。天下の戦乱を静めて世に封建の政をしき、徳川三百年の基礎を開き、日光東照宮を造営して將軍家の権力を示した、家康・家光の手腕に感心する。一武將より身をおこし欧州の天地を震撼せしめ、帝王の帝王と歌われたナポレオンに痛快をおぼえ、拍手喝采を贈るに躊躇しない。しかし彼の智勇に対して果して敬服することが出来ようか。

真の強者とは一体何か？

人類は彼が大きなる事業家でありさえすれば尊敬した。

彼らは偶像を崇拜する。大名や將軍でさえあれば、如何に非人格者でもそれを壇上にすえて拝跪した。しかし人間平等の思想は、こうした一切の偶像を打ちくだいた。

彼らはまた官尊民卑の思想をいだいたことがあつた。月給の高下がその人の価値であり、位階勲等を人格の表象のように考へた。しかし我らは芸者の一ヶ月の収入が時には数百円であつたり、忠実なる三十年の小学校教師が月給八十円であつたりすることを知つた。現代は金では決して人間の価値を定めることの出来ないことを知つた。

人格の光。人格の力。

私は真の強者を人格の光の中に見る。

強者とは力の人である。力とは人格の力である。

真人格の力。

たとえ万巻の書が読破せられても、真人格の中に溶融されてない時、万巻の事が与えた知識は、その人を毒し社会を害する。

真人格の光を忘れて、事業の大と、幅の広い生活を求めるのは、人類共通の誤りである。

売薬商が一頁大の広告を新聞紙に掲げて一代に名を天下に売る。広く大きく、それが現代日本の著しい流れである。真人格の光を忘れ、軽んずる時代には、人は必ず広く大きく外へ外へとのびようとする。

しかし大きいということが決して問題ではない。その中に何が盛られてあるかが問題である。

天下に知られるということが必ずしも問題ではない。高いということが必ずしも問題ではない。聖僧一人孤独の中に流離しつつ、貧困に生き、迫害に忍ぶ。時流れて幾百年、その末弟たちは大僧正となり、人爵に栄華する。いかに高くても一個の凡俗にすぎぬ。

高く、広く、大きいということは決して人格の質量に正比例しない。

地位のために人格を売り、権勢執着のために愚策を弄する一国の大臣より、清節三十年一村陶冶のためにつくす一村長が強者である。

人格の要素

一、思想の力

人格の要素の一つは思想である。

積尊には積尊の思想があり、孔子には孔子の思想がある。太郎には太郎の思想があり、八助には八助の考えがある。

積尊が尊いのはその思想生活が尊いのである。

ソクラテスが偉大なのは、彼の智と真理を熱愛する求道の態度であった。聖親鸞の偉大は教行信証の思想にある。

低級な思想生活をする者が、自己の思想を最上と考える時、智者から考えたら冷汗が流れるように感ずる。どんなに熱烈でも、その思想に大きな欠陥があったり低級である時、それに共鳴しそれを尊重する者はない。

時代はどんどん進歩し変化する。それを考えに入れないで、いつまでも明治維新ごろの物の考え方をしていたら、どんどん社会から置いてゆかれる。どんな老人でも頭の進む人は、その社会に重要な地位を得る。

しかし思想生活は決して竹に木をついだようには変わるものではない。昨日の思想が今日に流れて来る。昨年の考えが本年の思想の根底である。しかるに、自転車に乗って走るように、思想の表面だけに移り変わってゆく者がある。それはちようど井戸を一尺ほど掘ってから、底に掘ることを忘れて、横に掘るようなものである。こんな意味において変わってゆく者には深味がない。思想が進むとはこうした意味で変わってゆくことではなくて、深められてゆくことである。深まってゆくことはそれ自身人格の深さを増すことである。

思想を高めようとすれば、聞かねばならぬ。過去の人たちの思想を聞かねばならない。勉学の必要がここにある。勉学求道の精神は、人格完成に欠くことのできない根本的なものである。道を聞くことに至心に精進することを忘れた時、そこにはすぐ生々しい魂の創造成長はやんで、硬化しはじめの老人ができる。読書することは人間に与えられた思想向上の重要な手段である。読書することのない青年は、もはや彼の人生の完成を捨てたと言つてさえない。読書を忘れたら、そこには思想の向上はないとさえ言つていい。

中学に行けなかつたと泣く青年はいる。しかし勉学する青年がいない。大学にゆけなかつたとて自暴自棄している青年はいる。しかし五年十年頭をたれて至心に勉学する者がいない。

たとえ大学に籍をおいても、勉学することを忘れて、ただ大言壮語して、いたずらにモダンぶりの發揮にのみ腐心している時、彼は決して社会に何も残さないであろう。

しかしただ過去の先覚者たちの思想を聞くだけ、読むだけであつたらそれは決していいことではない。いわゆる「ライオンの食つたものはライオンになる」のでなければ、それはいたずらに頭につめこんだにすぎない。人格内容になつてしまい、血となり肉となつた時、はじめて思想は彼自身の光である。

一つの思想を思惟し、消化し、批判することを忘れてはならない。いたずらに新しいもの古いものをつめこむ時、胃腸をこわして下痢をおこし嘔吐をもよおす。思惟し批判し消化すること自身が人格創造の態度である。

はつきりとした思想をつかまぬ者に強さはない。自信はない。はつきりとした歩みはない。はつきりした歩みのないところに、人格の光はありえない。

崇高なる人格は、崇高なる思想に根ざす。

深い人格は、深い思想に根底を持つ。

思想が雑多であれば人格も雑多であり、思想が浅薄な時、人格は浅薄である。深くて底のない思想の深淵は、人格そのものの深淵である。

しかし思想は頭の問題であり、智にかたよつたものである。

二、強い意志

事が成就するか否かは意志の問題である。

偉人という偉人、聖者という聖者に意志の弱かつた人は一人もない。

どんな苦難の中にも雄々しく自らの意志を継続する。死をもつてしかもその信ずる道を変更しない。この人にして初めて、その前に無碍の一道が展開する。

彼は他人に意見を聞く、他人の思想を聞き、忠告を聞く。しかし彼は決して他人の道をゆかない。

彼は独立者である。

他律的の道を行かない。つねに、彼自身の道を自律的に行く。

いかに型だけは美しくても、親に強いられた道を行ったり、他人に責められていやや行ったりする場合、彼は彼の道を行つたのではない。人格を尊重しあう世界では、親は決して子供を他律的にのみ動く人形にしない。また人形を集めて喜ぶような暴君にはならない。

なぜその道を行くのか。行きたいからであり、そうすることが一番よいからであり、満足だからである。迫害があつても実行する。損になつても実行する。金を与えても動かさず、地位を餌にしても動かさず、名誉を与えても誘惑されず、衷心の願求のままに実行してゆく。そこに真人格の世界がある。

氣に入らなかつたら、帰つたがいい。愚痴を言っているのは、汝自身の道でない世界にいるからである。

報いられない、与えられないと言つて泣いているのは、汝自身の世界に生きていないで、他律的な世界に死んでいるからである。自分の道を自分が行く者は、死んだつて飢えたつて愚痴を言うべき余地もなく、自分の生活に一心である者には、認められないと泣いている暇がない。お前の出かたがよかつたら尽くしてやるが、お前の出かたが悪いから尽くしてやらぬという人がある。尽くしてもらわぬ方がけつこうである。その人は尽くしただけ、自らを高慢によつて傷つけ、侮辱することによつて相手を傷つける。自らの意志に忠実ならざる者の道はゆきづまる死の道である。

強者とは意志の強い人である。

鉄のような意志、火のような実行、信頼するに足る真人格がそこにある。

三、温かき心情

長い冬が去つて温い春風が訪れると、柳の芽がふくらみ、花の蕾がほころびる。

恵みの天地に万物更生し、温い空氣に万物創造の生命に若がえる。

生命のよろこびがここに歌われ、生き者の神秘がここに開ける。

真人格の光には、春の温さがふくまれる

飢えたる魂が真人格の温き心情の世界で更生する。

心の貧しき万人の群が、温き真人格の前に目ざめる。

一言の温かさが時に弱き者を強者に蘇生せしめ

疲れたる人生の敗残者が、真人格の袂に憩う。

彼は冬の嵐を春風に変え、

胸の氷を解いて慈悲の水となし、

人生のいきづまりを解いて人を無限の光の大地に送る。

彼は時に舟をやる順風であり、彼は時に病をいやす靈薬である。

彼の笑うところ万人笑い、彼の立つところに万人起つ。

暗き室にては電燈であり、冷たい室にては火鉢である。

現代人は学問も進んだ。利巧にもなった。しかし温かい感情の陶冶を忘れてはいないか。いかに世が変わつても人の心の情の無くなる日はない。人生に涙のある限

り、人はけつきよく情で動く。感情の陶冶、涙の浄化、それがどれだけ人格生活に重大なる関係を有するかを考えねばならぬ。

わずかな一言に怒ったり、その怒りを動作や言葉に移したりする者の人格は小さい。友と友が別れるのは理論が違うからではなくて感情離反からである。人と人が一つになつて結ばれるのは理論を超えた暖かい感情である。我らの幸、不幸を決定するものは、我らの感情生活においてである。

辛苦に遭遇して一たまりもなく動く者は感情生活に欠点がある。感情なくしては人生の味はありえない。しかし感情なくしては人生の暗もまたない。人生を光にするも暗にするも感情の動き方である。

暖かき心情の底に動くものは愛である。慈悲と言ひ、仁と言ひ、愛と言ひ。

愛なき聖者がありうるか。

慈悲なき人格者がありうるか。

彼らは深く人生を愛した。彼らは深く万人を愛した。

時に彼らの愛の手は草木禽獣の上にまでさしのべられた。

愛に輝く魂は地上における最も尊い神の顕現である。

彼は彼らの上に迫害・殺刃を加える者すら愛した。そうして彼らは崇い愛を高調して人を導いた。万人から父と仰がれ、神として仏として尊信せられる者、すべて愛の生活者であつたからであつた。

真人格は所詮愛の人格である。

いかなる思想もそれは愛の火の中になげ入れられよ。

真人格の愛の火を通してのみ人生のために有益となるであろう。

偉人聖者は強者であつた。

ああ。汝よ強者であれ！

真の強さはいづくにある。

愛の人格の上にのみそれがある。

一切群生の上に大慈悲をもつてむかうところに釈尊があり、親鸞がある。民族の上に熱愛を感じるところにガンジーがあり、国家の上に熱愛を感じるところに大西郷があり、カブルがある。楽聖ベートーベン・画聖ミレー・俳聖芭蕉、一つとして人生を熱愛せぬ人があるうか。偉大なる人格はすべて真愛の持ち主であつた。宗教も、芸術も、詩も、歌も、それらはすべて愛の人格から生まれる。

冬日静思

雪花が散る。

大地の上には全てのものが、忍従の中に静かに息をつづけている。

私は冬がすきである。それは汗の多い私が講演が楽であるという理由ばかりではない。

冬枯の森の静けさ

谷の小川の流れの清らかさ

天地は原始のすがたにかえつて静かにくそうして厳粛に眠っている。

静かなる田舎の夜、自動車が一台通つたあとには又、鉄瓶の湯の音より外に何の音もない。

窓を開ければ寒月ものすごく中天にかゝつて風は身にしみて寒い。

物を思うに相応しい夜である。

雪を見れば遠くはなれた故郷を憶ふ。

一尺二尺と積んだ白銀の世界に、なおも牡丹雪が静かに降りつもる。

藁細工に更ける炉ばたの夜は、四方山の話に時の移るを忘れている。

そうした時には、親鸞聖人や釈尊の聖話が物語られる。

「こんな雪の夜に聖人様は越後で御難儀あそばしたのであらう。」などと。

来る年もく雪を見れば故郷山県をおもい、故郷を憶い出す時、聖人をおもう。

釈尊の一切群生の上にそゞぎたもう無蓋の大悲によつて、智者舍利弗も救われ、
ば、愚者槃特も救われ、身分高き阿難も救われ、ば卑しき尼提も救われた教えが、何
時の程にか日本にも流れ来つて、天台・高野の聖者の宗教・智者の宗教・男子の仏教
となりて形だけ残つた日に、そこに宗教の天才があらわれて、大地にあえぐ万人の上
に聖なるみ旨を生かすべき人が必要であつた。

その先駆は法然上人であつた。易行の大道・万人の救われてゆく宗教、浄土宗の旗
色も鮮明に現われたのは法然上人であつた。しかし上人の宗教はやはり修道院の宗
教であり聖者の宗教であつた。

寒いく／＼広野、光のない煩惱の大地に自ら愚禿と名のり、人間の上に、凡人の上に、
恵まれぬ万人の上に、純なる救いを示したのは親鸞聖人であつた。釈尊の出世の本懐
は復活した。ああ寒き広野の宗教よ！ 素人の宗教よ、如来の大悲は大地の涯にたた
ずむ一人の上にこそあつた。

冬枯れの広野に立つて、死のような静寂を感じる。

しかし眠れるが如き万象の上には、強いく／＼力が見える。

私は冬がすきである。寒いく／＼北風すら厳粛な厳粛なひきしまりを感じさす。何
物も清算されて、そこに一分の妥協も偽善もゆるされぬ。物みなは彼自身の真剣な現
実に曝露されてある。

亡びる者は亡びよ。凍える者は凍えよ。風よ吹け、水も氷結せよ。森も林も素裸となれ、そうして寒風の厳しい洗礼をうけよ。そこには、春雨のような媚態もなく梅雨のような柔弱さもない。真夏すら青葉のかげには、涼風の笑みがある。一切よ、かえれ汝の素形に、汝の実力に。かくて彼らは寂滅のような静けさの中に、一分のすきなく息づまるような静けさをつゞけている。

しかしその静の中に、熾烈な動を含んでいる。万象の上に動くこの力、その力だけが大地の底に、固く結んだ芽の中に、灰色の森林の中に、土に埋れた道ばたの枯草の底に、はつきりと動いているのを感じる。

法蔵菩薩は一切群生の大生命たらんとして、至心・信樂・欲生と誓われた。冬枯れの中に力を感じずる私は、一切群生の上に一如より来生まします法蔵菩薩の誓願を感佩する。

冬枯れの大地、それは寂しい。しかしそのいづれの上にも強い力が内在する。一切衆生の無明に狂ひつつ覚めやらぬ戦いの世界は、冬の日のように限りなく寂しい。しかしその上に、至心に廻向し、還相し、招喚まします如来の本願力を拝む時、厳肅な一道をにらむ。そうして不可思議なる力を感じる。誠に我らの欲生心はそのまま如来の願心の顕現である。

季節にだつて春夏秋冬がある。

天気のだつて晴雨曇天がある。

我らの上にも笑う日もあれば泣く日もある。

嬉しい日には笑つてもいい。

悲しい日には泣いてもいい。

だがどんな日にも太らねばならぬ。のびねばならぬ。

縦にのびられねば横にのびよ。

右にのびられねば左にのびよ。

真直に行かれなんたら横にまがれ。

無理をすな。冬のような日には、じつと沈黙し待っていよ。

何時までも冬はつゞかない。

誰の上にも春が来る。温かい春が来る。

冬は強い力の培われる時だ。

逆境の日は冬である。

赤裸々な我がすがたを凝視しつつ、

忍従の日を力に生きよう。